

課題名：ILC実現に伴う外国人研究者等が快適に安心して生活できるためのワンストップサービスに関する研究

研究代表者：社会福祉学部 准教授 佐藤哲郎

課題提案者：岩手県、奥州市

研究メンバー：佐々木淳（岩手県理事兼制作地域部科学ILC推進室長）

技術キーワード：ILC（国際リニアコライダー）、外国人研究者

▼研究の概要（背景・目標）

国際リニアコライダー（ILC）に関して、奥州市では、「ILCまちづくりビジョン」を策定し具体的な受入環境に関する取り組みを県内で先進的に進めている。そこで、本研究においては、地域住民や関係事業者、教育など各分野での関係者との協力・連携体制が構築され、ILC周辺自治体全体にその取り組みが広がり、研究者等の受入れ環境が県内各地で整備されていくことを目的としている。

▼研究の内容（方法・経過）

関係者が課題を共有し、対応策を検討するため、ワークショップを実施した。

1. テーマ：「ILCが実現して、自分の身の回りに外国人研究者やその配偶者、子どもが居住することになったら、どうなる？そうする？」
2. 参加者：奥州市国際交流協会、奥州市、県
3. 方法：①県による状況説明（表1参照）
②グループによるワークショップ

▼研究の成果（結論・考察）

ワークショップにおいて、ILCの科学的意義だけでなく、立地地域における、人口増にとどまらない、多文化共生や、地域の子どもが海外に視野を広げるチャンスがあることなどを共有することができた。一方で、多文化共生社会へスムーズに移行できるかという不安、受入れ環境整備として取り組むべき課題について参加者間で共有することができた（表2参照）。

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

- ① ILCにより期待される点について、より多くの地域住民と理解を共有する
- ② 課題とされた点については、関係機関がそれぞれの立場で何ができるかについて検討する
- ③ トータルで外国人研究者等へのサポートとなるよう連携を強めていくことが重要である。

【県による状況説明(表1)】

- 研究者等は5～6千人でその半分が外国人と推計。
- 20～30才代の若い研究者が多い。
- ILC近傍に住みたいと考えている研究者が約半数。
- 研究者子弟は小中高生で約400人程度と推計。
- 先進地事例調査を実施し、医療、教育、住居などが課題になると想定される。
- これら課題を解決するためにワンストップで解決できるよう行政機関、国際交流団体、学校、町内会、企業、NPO等が協力していくことが重要ではないか。

ワークショップの結果(表2)

期待・良い方向への変化	課題や工夫がほしい点
a)地域が元気に 人口増、産業活性化、多様化（レジャー、文化）	①住環境の整備、②自然環境への影響、③自治体の歳出増、④固有の文化の変化、⑤外国文化の理解、⑥自治会、学校、⑦トイレ、⑧多言語化
b)世界へ！ 興味向上、やさしくなる、外国語の習得、新たな視点で良いところを発見	①運転免許、公共交通、②医療、③手続きの多言語対応、④保育、教育、⑤ホテル、民泊、⑥総合的に非公式に動ける人、組織、⑦通訳、キャッシュレス、⑧東北弁、やさしい日本語
c)国際都市 d)地域活性化 e)教育 f)行政改革、議会改革 g)経済波及 h)産業振興	①コミュニケーション、②地域に入る仕組み、③相談窓口、④役所手続き、生活ルール、⑤教える先生、教え方、⑥協力企業、海外への売り込み
i)人口増（若者、外国人） j)地域活性化 k)国際化、異文化交流 l)便利な社会 m)子ども（海外への視野） n)経済活性化	①名所のブラッシュアップ、②ボランティア案内体制、③他者受入れ経験不足、④地域に巻き込む工夫、⑤近所トラブル、⑥教育、医療、農業参入、⑦外国人労働者、⑧交通事故
o)情報発信（SNS） p)観光、食、地域活性化 q)共生、出会い、教育 r)農業、ビジネス s)インフラ整備	